

新定

中等習字帖

二

二卷

220.72



K220.72

39

2

國體之精華

教育之淵源

墨堤兩畔櫻

二〇二

花今正爛漫

地味膏腴宜于

禾穀適于蠶桑

本戶大久保西

鄉維新三傑也

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ

博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習
ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ

進デ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國
憲ヲ重ジ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレ

バ義勇公ニ奉ジ以テ天壤無窮ノ皇
運ヲ扶翼スベシ

少年易老學難成一寸光陰不可輕

未覺池塘春草夢階前梧葉已秋聲

蟬の讀経は松蟲鈴虫の
唱歌となり桔梗咲き萩

亂れす、き穂に出で粟
の實はじけ飛ぶ

農工商者經濟之基
礎其消長繫國運之

隆替豈可不講之振
興策哉

人の性質は一舉一動に
顯れ出づるものなれば常

に沈着の態度を保ちて
事々物々に戒慎すべし

陽氣發處金石之透

二ノ十一

精神一到何事不成

旅情匆忙早くも一週日を過し候 十五日曇静岡
になほ一泊漆器製茶の業を視察致し候 十七日
静岡数名古屋着廣小路郵便局の附近山田屋に宿

り候 十八日晴 十九日小雨二日間滞在して
磁器殊に七寶焼につき取調致し候七宝は長足の
進歩一閑張もなか／＼手輕にて良きもの出来候

二十日朝なほ微雨後霽閑西線にて發四日市に
て下車一泊商業學校を參觀し又萬古焼につき研
究致し候 今日晴早發龜山にて乗り替へ午過ぐ

る頃山田に着き外宮内宮に参拜し二見は見ずし
て津まで引返し申し候明日は奈良方面へ向ひ申
すべく供餘は後便に譲り候

雪似鵝毛飛散亂

人被鶴聲立徘徊

身體髮膚受之父母不
敢毀傷孝之始也立身

行道揚名於後世以顯
父母孝之終也

松や愛すべし隆冬凋落せず
孤高天を衝く松や賞すべ

し断崖石皴の間亭くとし
て稜々たる奇骨を發揮す

栗鼠攀樹摘胡桃
嚼破其皮頻舉戚
曰何其苦既

及核笑曰先不喫苦
安有得此滋味

昔は木の種樂は昔の種と知るべし恩を
忘るゝことなかれ子ほどに親をおもへ
控におぢよ火におぢよ分別なきものに

テラ太

おぢよ朝寝すべからず小なることに分
別せよ大なることは驚くべからず九分
は足り十分はとほると急るべし

學者その身を奉ずる當
に金玉のごとく然るべし微

にだふ瀬失あらば以て天
下の至寶となすに足らば

詔書

朕惟ふに方今人文日に就り月

三十八

に將み東西相倚り彼此相濟し
以て其の福利を共にす朕は爰に
益々國交を修め友義を惇し

海雀正長書



29 230.72-29-2

明治四十二年三月六日印刷
明治四十二年三月九日發行

定價各金廿貳錢

編輯者

友田宜剛

書者

丹波正長

發行兼印刷者

青野友三郎

發行所

日本橋區通四丁目七番地
(電話本局三二五八番)

文魁堂書店

不許
複製

